

ぼくのねこボー

正直でいる勇氣

3年 E・Aさん

わたしは小学一年生のときの漢字のテストでカンニングをしました。初めてのテストだったので、ママにどうしてもほめてもらいたくて、どうしても思い出せない漢字を先生が教室にいないすきに、教科書で見えしめました。バレなかったのですが、このことはずっと心の中にのこっていました。それは小さな風船となって、だんだん大きくなり、心の中をしめていきました。そして自分自身にうそをついている状況もいやでした。もう限界でした。

小学三年生になったとき、もう言わないと気がすまなくなり、お昼の時間に教室にいた先生に思い切って告白しました。すると先生は、「一年生だからしょうがないよ」と言いました。おこられると思っていたので、ほっとしたと同時に、心の中の風船がわれて、心が軽くなりました。

とおるくんは迷いネコだと思ってかわいがっていたボーが、転校してきた森くんのネコだと知って、心の中がぐちゃぐちゃになります。「ずっと自分のネコにしておきたい」という気持ちと、「本当のことを言わなきゃ」という気持ちがつかり合って、なかなか言い出せませんでした。でも、わたしは本当のことを伝えるのに二年かかりましたが、とおるくんはわたしよりずっと早く本当のことを伝えました。とおるくんは勇氣をもって森くんに伝えたからこそ、ボーを、森くんに返すことが出来て、二人は本当の友だちになれたと思います。正直でいるのは、だれにとっても勇氣がいることです。でもその勇氣をもつことが出来れば、心の中のいやな気持ちはふくらず、もっと自由でいられるとわたしは思います。わたしはこれからも、どんなときも正直でいる勇氣をもてる自分でいたいです。

「ぼくのねこボー」は、その大切さを教えてくれました。